

部屋が十以上あったと思います。三百人ほど収容されていましたが、作業は鉱山作業と伐採作業が主でした。

私は二十二年五月ごろまで伐採し、以降二十三年七月に帰国するまで鉱山作業をしていましたが、給与の改善とともに体力の回復により、若さもあり、作業も苦にならなくなり、常時、ノルマの完遂により一〇〇%を超え、月に二百ルーブルをボーナスとして給付を受け、嗜好品等を買いたくともありました。

一方、二十二年ごろより、日本新聞による民主化の波も急を告げ、軍隊の階級制度の廃止と同時に、抑留者による所長の選挙等。演劇を中心とした文化活動。共産主義の啓蒙等。二十二年の後半より二十三年にかけて激動の時代でした。ハラシヨラポートは外出も許可され、食堂でロシア娘を交えながら軽食をした思い出もあります。

七月、収容所の閉鎖とともに、いよいよ待ちに待ったダモイ。チタ市において帰国団の編成をして、貨物列車（二段式）にて鉄路ナホトカへ。一、二、三の収容所を通過して八月二十日前後出港。三年ぶりに見る

祖国、日本。郷里の方々、家族等、思いはめぐり、期待と不安に興奮がやむところを知りませんでした。

悲惨な抑留者の生活

新潟県 周 佐 喜代止

昭和十八年に高田連隊に入隊して間もなく北支派遣となり、河北省の清豊県、嶋第二九六部隊で初年兵教育を受け、やがて陣第四二八六部隊眞柄隊に編入され、毎日の作戦で移動が続き新城県で左肩を負傷しました。また、河南戦等にも参加しました。それから二十年八月に急に戦況が変わり、万里の長城を越え満州の通遼で終戦となり、奉天で武装解除され北陵大学に集合。その後人員の関係で戦友とも別々の貨車に乗せられ、私たちはウラジオ経由で帰すとたまされ、着いたところは囚人たちの働くブカチャチャの収容所でした。作業は坑内炭坑でした。食糧の悲惨さは一食分が湯吞茶碗一杯の豆、そしてアワ、雑穀の粉等、それも

石油の臭いのする、湯で混ぜたものばかりが続きました。

私は幸いにも健康でしたので二級となりました。作業内容は一級と二級は坑内作業で、三級は軽作業で主に収容所内の作業とに分けて、強制労働に就かせたのです。収容所内は五棟くらいに約二千人くらいを収容し、毎日の重労働で一年足らずの二十一年の夏ころまでに約半数くらいの戦友が亡くなったと思います。その主たる原因は、やはり食糧不足と重労働、そしてソ連兵にだまされた恨み等々で、祖国に帰れる望みや自由が全くなかったための絶望感によるものと思われるような「シベリアボケ」というのか、野良犬同然のようでした。また、馬の糞もジャガイモに見え、春ともなれば収容所内や道路端の雑草さえも飯盒で煮て食うありさまでしたので、食生活が悪いための栄養失調者が続出しました。私は坑内の坑木の組み立てやら削岩機で石炭の層に穴を掘りダイナマイトで爆破をするなどの作業でした。ときには空腹のあまりダイナマイトも少々食べてみましたが、その味は甘酸っぱいような

シビレる感じでした。もう人間の生命の極限とでも言わざるを得ませんでした。

この収容所では毎日のように寝台の上下横の戦友が何も言わずに死んでいきました。その姿は、お尻の穴は大きく開き、ちようどカエルの日干し同然でした。

私は山村生まれで炭焼きや伐採等の職業柄健康な方だったが、戦友の死に方を見てみると今度は私の番かなと何度もお尻の穴に手を当てたこともありました。

その都度妻子や家庭のことを考える。こんなところで凍土と化したくないと頑張りました。また、朝作業の出発のとき戦友の死体を車やそりに乗せ材木を積むようにして運び出すのを何回となく見ました。本当に胸が苦しい思いでした。作業は三交代制です。収容所にたどり着くまで重い足を引きずりながら二時間もかかります。また坑内から黒い顔で地上にはい出れば、冬期間日が短く幾日も太陽を拝めないありさまで、霧が凍るのか空気がピカピカと光って見えます。また、夏はその反対で大きな太陽がなかなか山に入らず、夜などないような状態になります。

私はロシア人の親方にハラショーラポータと言われ
て来ましたが、ついに病氣になり血便たれ流しの戦友
とともに貨車に乗せられ、今にも死にそうな人たちと
幾日もかかって、ようやく着いたところはチタの西の
方に当たるカクイというところの塙をめぐらした大き
な病院でした。道中、貨車の中は血便と死臭とうめき
声に満ちていました。何しろ二百人くらいのところ、
約半数は亡くなったのではないかと思います。それな
のに看護人もおらず、ただマンドリン銃を持った兵隊
が二、三人どこ吹く風とばかりに通ります。がりの女たち
をからかっているありさまでした。全く言葉にも表わ
せないほどです。患者の中で歩ける者はだれ一人もな
く全員担架で運ばれたのです。病院の院長さんは女医
でしたが、院長の言うにはブカチャチャではこんな
にもひどくなるまで酷使したのかと嘆いていたそうで
す。戦友たちはブカチャチャは全く地獄だったなあ
と言っておりました。それに比べればここは天国だと言
い合ったものです。また院長さんも看護婦さんも本
当に親切でした。時々食べたことのないような白いパン

にバター、種々の栄養食を与えられました。それで余
りにも環境の激変によるのか、それとも目色は違っ
ても心の優しい看護婦さんにより、おふくろや姉妹に会
ったような気がして安心したのか、二、三日後には数
十人も戦友が亡くなりました。私は現在でも、あの
病院で精いっぱい看護して下さった人たちには国境を
超えた命の恩人と心から感謝いたしております。私は
幸いにも病氣は回復して、二十二年厳寒二月ころにま
たブカチャチャの収容所に帰され、再度坑内作業に従
事しました。馬にトロッコ二十台ほどもつないで坑木
の運搬並びに坑木組み立てや石炭掘りと重労働の毎日
が続きました。食糧も少々よくなったが満足のできる
ほどではありません。また収容所内の人員の移動やら
で変わっており、私が伝令として伝えた橋本中隊長も
すでにおりませんでした。

その後四月ごろでしたが、今度は帰還できるとのう
わさも耳にするようになり、まもなくブカチャチャを
去り、ナホトカの収容所に着きました。ここでは毎日
製材工場や道路工事に強要され、また朝晩はインター

ナシヨナルの歌を、また無理やり思想教育をされ、私
たちには理解のできるはずもないような教育でした。
いよいよ待ち焦がれた帰還船に乗り込んだのですが、
まだまだまされるのではないかと疑惑の念は消えませ
んでした。が、岸壁を離れるとすぐ船長の挨拶があり、
本船にはソ連兵は一人も乗っておりませんのでご安心
下さいとの言葉が、四十有余年を経た現在でも脳裏に
焼きついて離れません。

キリエの寒さと飢えに闘って

新潟県 小山 九 藏

終戦は奉天の満州野戦高射砲第九〇大隊で迎えた。
現地召集の一等兵、毎日が戦車対射訓練の中で武装解
除。

奉天からハバロフスク、そしてチタ地区のキリエ収
容所へと貨物と白魔の中の徒步行軍。マンドリン銃に
こづかれながら、時計や万年筆、皮製品を剥ぎとられ

ながら灯りもない収容所へと連行された。

銀採掘の鉱山での強制労働の日々が襲ってくる。零下
四十度の寒気、防寒帽は夕方からは吐息が真白な氷柱
となる。目のまわりも霜柱がまつわりつく、痛いとい
う感覚である。

食糧は黒パン二百グラムくらい、岩塩親指くらい、
大豆二十粒くらい入った飯盒半分くらいのスープで、
日増しに栄養失調者がふえていった。死者も多くなっ
ていく。人間、飢えと寒さほど恐いものはないとだれ
しも思ったことだろう。

私は、満州電々公社で技師長をしていたので電気技
術者ということで、鉱山内の配線、器具の修理が帰還
までの作業であった。

裸電球を一球増しては寒気しのぎのために防寒具内
に隠し入れては暖をとり、仲間たちにもそれとなく世
話していた。

暖気をとることはできても、飢えには耐えられない。
窮すれば通ずることわざの実行をした。警備歩哨にニ
クロム線を利用した暖房器具をつくってやり「ポリシ